

あつたようである。

九五式爆雷は十九年末以降、たとえ機銃掃射を受けても誘爆を起こさない二式爆雷と代わり、防御が楽になつた。この二種の爆雷は、いずれも同一の大きさであるが、二式は九五式より七年も新しい昭和十七年に正式兵器として採用されたものである。

日本海軍は艦隊決戦主義を金科玉条として訓練して来た。従つて、商船を守ることはさほど重視していなかった。

ところが、第二次大戦が始まり、敵の潜水艦のために次々と商船が沈められると、慌てて護衛用海防艦のマスプロを開始したのである。そこで、海防艦は建造を急ぎ、たとえ個艦の性能は多少劣つても、早く、安く建造できることをモットーとした。建造費は駆逐艦の半分以下であつたようである。

これら海防艦は、海軍兵学校（江田島）でのプロの士官よりも、商船学校を卒業した予備士官によつて指揮されることが多かつた。

海防艦の任務は、地味な辛い仕事であり、駆逐艦の

ような格好良さは全く見当たらず、彼らの辛抱強い努力があつたからこそ、曲がりなりにも商船隊は船団を組むことができたのである。

海防艦は第一号海防艦より合計一一六艦であつた。

青年学校義務制と軍隊

海軍

滋賀県 武村正男

大正十（一九二一）年四月六日、私は姉二人の六人兄弟の長男として生まれ、昭和六（一九三一）年には十人の家族になりましたが、当時としては普通の家族人数であつた。

昭和三年四月、葉山村立葉山尋常高等小学校に入學。男女合わせて百余人で、紅白二組に分けられ、私は紅組で生徒数は五十二人であつた。全校生徒は八百人余りと言われ、毎年三月十日の陸軍記念日、五月二十七日の海軍記念日には朝礼後の一時間は、日露戦争

の旅順陥落や日本海海戦の話を生先生が交替で書いていた。

満州事変や上海事変が相次いで起こり、雑誌「少年倶楽部」等に「日米若し戦わば……」というような記事が書かれてあり、戦争はあるんだなあ、そして自分も戦争に行くんだなあ、と考えるようになった。

昭和十一年三月、高等小学校を卒業した私は、翌四月、葉山青年学校一年に入学した。わが国教育制度においては、正規の中学校に進学しない者に対する教育機関として当時、実業補習学校と青年訓練所とが存在したが、昭和十年、両学校の特色を取り入れた青年学校制度が確立された。次いで昭和十四年四月二十六日、青年学校制度の義務制が次ぎのごとく実施された。

教授及訓練科目としては、修身科及び公民科、普通学科、職業科、家事及び裁縫科、体操科、教練科があり、教練科においては、教練及び体操のほか、競技及び武道を課することとし、男子に対しては在営期間の短縮を認めること、などが行われた。中でも、教練

は、既教育の在郷軍人により行われる年一回の査閲があり、現役の陸軍中佐級の人が査察官として来校されていた。

昭和十五年十月二十三日、京都連隊区より中井中佐が来校の後、十二月十九日、再度査閲があった。県で三校、査閲官は陸軍少将・木村直樹閣下、陸軍大佐・武村有義、そして中井中佐以下中佐九人、憲兵軍曹二人、合計十三人、そのため閣下ラッパを既教育の人を頼み行われた。

その日は、出迎えるころより雨が降って、それが大雨となり、分隊教練で伏せると服まで水が通る。他の観覧者は雨着を着ないでおられた。

この年の十一月下旬、近畿三府四県の青年学校生徒の連合特別大演習が行われ、総指揮官は陸軍中将・南次郎閣下であった。午後二時、京都伏見歩兵第九連隊の営庭に北軍が集結、奈良橿原神宮付近で払暁戦の想定で進められた。

稲の刈り終わった泥田の中を展開しつつ夜九時、露営

になった時から、さらに将校斥候として山本少尉ほか六人で四時間、敵偵察に敵方の声の聞こえるところまで侵入し、還って食事後、ひと休みと思うころ出発と、休む時などない状況。第一線にいる人々も、このようなことだなあと思えば我慢もできたけれども、帰りの電車の中では土足も何もそのまま床に腰下してうとうと、気が付けば京都駅に着いていた、という状況だった。

昭和十六年三月、五年生卒業、研究科一年に籍を置く。間もなく青年学校生徒担任の先生から、青年学校生徒御親閲に参加するようにと話が合った。日時は五月二十二日午前十時、宮城前広場、全国生徒三万四千人余り、内女子四千二百五十人である。

総指揮官は陸軍少将中代豊治郎、副官は陸軍少佐・濱田正平、同陸軍中尉・渡辺強平。滋賀県は第七集団で、集団長は熊野大佐、副官可児中尉、同河合中尉、第一大隊長は高野秀太郎大佐、副官上野五百作少尉で、四個小隊二百四十人、女子五十人であった。

五月十八日、一日中分隊行進の訓練を行い、五月二十一日、駒沢練兵場で一日中分列行進の訓練。五月二十二日快晴、午前九時までに所定の位置に着き、総指揮官の指揮下に入る。総務係長、九時二十五分までに分列発起点に位置す。

午前九時四十分、帯刀者抜刀、執銃者着剣、鹵簿ろぼの先駆は二重橋通過の際、ラッパ音の「気を付け」と共に軍楽隊の『君が代』の吹奏、壇上に着座。

第一集団より第一〇集団、約四〇分間、陛下は直立不動で壇上から答礼されることに文部大臣より「何々道府県名」を説明する。分列行進が終わり、女子生徒による奉唱歌を奉唱して奉送いたし、軍楽隊の演奏により還御あらせられる。その後二群に別れて明治神宮、靖国神社に参拝す。顧みて、四〇分の長きにわたり壇上で直立不動で答礼されていた陛下のお姿に感銘を受けた。五月二十四日、指定列車で帰ったが、往復の間、富士山がどこか教えてくれる者もなく、車中で眠てしまい見ることもなく帰宅した。

明くれば五月二十五日、徴兵検査の日であった。当

時、国民の三大義務として、教育、納税、兵役の三つがあり、その兵役に服務の可否についての身体検査が行われた。就学のため延期していた者も三人程度いた。私の検査の結果は、徴兵官・飯田大佐から「体重不足、第一乙種、体に気を付ける」と言われたが、後に現役証書がきて「昭和十七年六月三十日、舞鶴海兵団に入団すべし」とあった。

今まで自分が海軍に入団とは思ってもみなかった。陸軍歩兵操典は大体分かると思っていたし、乗馬も少しはしたし、担任教諭（陸軍少尉）から「お前が軍隊へきても、これ以上教えることもないわ」と言われていたが、海のこととは全く分からない。しかし瀬田川でのボート乗りや田舟乗り、琵琶湖で泳ぐこと等を練習したことは後に役に立った。

昭和十七年二月、役場の兵事係が現役証書を返してと、取りにきた。大東亜戦争が勃発していたので入団は早くなると思っていたら「九月一日、入団」と遅くなった。後で分かったことは、既教育の兵を先に召集していたからとのことである。

話は変わるが、昭和十四年ころから青年学校生徒六人と引率者一人の計七人で、他校と交替で二十四時間ずつ、当時栗太郡下田上村役場の前に高さ一〇メートルほどの見張り台で防空監視に当たっていた。本部は名古屋第三師団にある中部管区軍司令部だった。昭和十七年四月十八日、快晴、当番の葉山村監視員陸軍上等兵・園田惣五郎引率の六人で、いつもと変わらない勤務をしていた。……と電話が鳴った。受話器を耳に当てた。「中部管区空襲警報発令」と聞いた私は「演習ですな」と言ったら「馬鹿者！」と怒鳴られたことが今でも耳に残っている。後から考えると、演習の場合は「演習」を先に付けるが、勝ち戦の報道ばかりであった当時では、気が付かなかったのは他人と同じであった。

この時は、B25（中型爆撃機）一機で、名古屋方面から京阪神方面へ、高度一万メートルで、偵察のみで迎撃機も飛ばなかったようだった。

昭和十七年七月上旬、当時青年学校担任の清水定一陸軍少尉は応召され、北川俊一中尉に変わっておられ

た。北川先生が見えられて「ちょっとお願いにきた」と言って「期日は八月十二日から八月二十五日、場所は伊勢神宮の茅地造成事業勤労奉仕隊参加に、内地の者は滋賀県五百五十人程度で、ほか朝鮮、台湾、満州等外地ばかりだそう。きついだろうが行って欲しい。詳細は追って沙汰する」とのことで、受諾する。

八月十日から八月二十五日まで毎朝、朝礼から始まる。現地では真夏の日、山肌の雑草の地を開いて茅を植える。汗で汚れた体を清い流れの五十鈴川上流で水浴をした思い出が、今甦る。帰って五日は瞬く間に過ぎ、八月三十日、青年団員として、今まで何十個と立てた紅白の門を今自分が潜る。そして二度と見ることはないであろう景色や人々に別れを告げつつ、字や村の送別会、そして歓呼の聲に送られて車上の人となった。その時、一緒に送られたのは四人。されど歌の文句にある通り、思いもよらず、我一人不思議に命永らえて……復員するとは知る由もない。

九月一日、舞鶴海兵団に一步を記す。仮編成で、第

十七分隊・第三教班・班長は相馬鉄二・三等兵曹（砲術科卒業、十七人中八番目）、兵籍番号舞徴水一〇一九五。教班長より初めての言葉「ここは娑婆とは違う、よって一から教えるから、言った通りにしろ。分からんことは何でも聞け。お前たちはやっていると思うが、右手に箸を持ち、左手に茶碗を持って飯を喰う……」と。

身体検査あり、食堂、便所、教官室、教員室等皆を連れて回り、服装、帽子、靴等は手を入れて、これは大きいと取り換えに行ってくれた。三日ほどして「何か一つの試験を受けるように」と言われ、外れるものかと思ひ、通信を受けたら一人受かり、第二十二分隊に移動し面倒を見てもらった。

教班長に「お前は出ていくのか」と言われ、申し訳なく思った。かくして第二十二分隊第四教班四等水兵・武村正男が誕生した。

このころでも、私物を持って隊門を出る帰郷者もあつた。第二十二分隊徴兵と第二十一分隊志願兵とが、各八教班（一三六人ずつ）を海軍大尉・鶴飼佐蔵

分隊長・四教班長海軍二等兵曹・奥栄作。編成替えして一週間ほどして消灯時、当直教員より「軍隊にはこのようなものがある、見とけ。ここは娑婆と違うのだ」と大喝一声、机を叩く音がした。見れば朱塗りの木刀である。しばらくの疲れと幾日かの馴れで、だらけて来た時でもあった。

十月中旬「ただ今から武装して兵舎前に集合、かれ！」と号令があった。百二十六人中八番目に整列した。十五人ほど集まった時「もうよい、解散！」と言われたので、何が何だか分からず尋ねると、「十月二十三日運動会があり、出場者を決めるのに分かんから早いものから十人を決めるためだ」とのこと。後にジフテリア発生で、運動会は取り止めとなった。

取り止めの日、第二十二分隊教班対抗のボート競争が行われた。奥教班長は皆に言った。「外のことでは他の教班の班長ほどやかましく言わなかったが、ボートは私の得意とする種目であり、絶対負けてはならん」と。そう言われると練習から気合いの入れ方が、他の教班とは違っていた。

私は一番前の右側、瀬田川での練習が認められたのか練習に前を指定された。審判は分隊長、分隊長、別艇で見ている。一着でゴールに入るなり教班長が「ヤッタ、ヤッタ！」とバッターを振り上げ、両手で「万歳！」をした。そして皆にも「ようやくた」と労をねぎらったが、自分もにやかな笑顔で、まもなく進級してラバウルに転勤された。

十一月から制度が改正され、入団した時は四等水兵だったのが、進級もあって一等水兵に変わり、十一月二日、横須賀海軍通信学校第六十三期生として入隊した。ここは全国の四海兵団からの寄り集まりで、普通科の我々と高等術練習生・電波探信もいる。前には機関学校や工作学校、少し離れると航海学校等があり、大勢の兵隊基地でもあった。

私は第七十六分隊三教班に籍を置いたが、舞鶴の時の仲間は三人か四人ぐらいいたのかなあと思うくらいで、隣の第七十五分隊にも知る者はいない。学校長は降旗海軍中將。第七十五、七十六分隊長海軍中尉・中

村一三、第三教班長は吉田上曹であった。

学校で授業が始まった最初に、吉田教員から通信用紙を渡され「自分に読める字で、一分間で字を書く。

七〇字を書けた者は」と言われ、二人が手を挙げた。

この二人は船乗りで、通信員であった。吉田教員は「そのうちに書けるようになる。標準は一分間に八〇字、欧文は一〇〇字。最高は和文一〇〇字、欧文一二〇字だ。できるように教える」と。

学校は新兵の時とは違い、週に一回半舷外出があり、指定の集会所で娯楽や軽食もでき、民宿で休憩もできた。帰りの時間は、出る前の整列の時に当直将校から「門限は午後五時」と言われていたが、教員よりは三〇分前と指示されていた。

二月の初旬ころ、私の前の伊藤一水が、遠出をして三〇分前に一〇分遅れた。学校の当直将校が言った時間よりは二〇分早い。この日の当直は第七十五分隊の先任教員、善行章三線、新しくないから十年は越えているだろう。この教員が「皆聞け、あれほど言っているのに遅刻した奴がおる。気合いを入れてやるから出

てこい。両足を開き両手を挙げ、拳を握り歯を喰いしばれ」とバットが飛んだ。幾つかで倒れる。兵舎の隅に空気乾燥防止のために桶水がある。「水持ってこい」と水をぶっかけ、気付き、立ち上がればまた叩く。「あと気を付けろ。元の位置、解散」。教員の臉がうるんでいた。このような時でも休業とか入院とか聞いたことがない。

夏の日、各分隊長交替で久里浜海岸へ水泳に出た。私らの尻が皆、紫色に血がにじんでいた。終わって校庭に教員整列があった。約七百人、校長から「あまり手荒なことをしないように」と注意があったが、変わらなかった。

日が経つにつれて習うことが多くなってくるし、三日ほど前のことを試験で、また毎日新しいことを試験する。送受信機、発電機、欧文電報傍受のため、ローマ時符号を覚えることや書くこと、数学、幾何、代数と、終に兵器機を第二とし、送電を一とした。

卒業前の実地の訓練で一カ月、平塚市の分校から送

受電できるようになった。平塚で満月の夜、松の小枝越しに富士山をくっきり見た思い出は今も臉に浮かぶ。配属が決められ、一人一人班長から理由を述べ、申し渡された。

百三十六人中百人を航空機と潜水艦、「お前、視力が弱いため南京警備隊勤務」と申し渡された。「何れも同じだ、気張るよ」と。八月四日、久里浜駅から電車に乗る。電報扱いあり、申し込んだが、後で夜行列車がないと諦めた。京都は午前三時、知り合いに出会い、伝言を頼む。広島、されど後に焼野原になろうとは知る由もない。

列車は翌日、佐世保へ、海兵団仮入隊。各地への船便待ち、約五千人。当直は善行章五線の上等兵曹、正しくは先任衛兵伍長。ある朝、朝礼に大喝一声「佐世保の海兵団はちよつと違うぞ。見とけ……出てこい」と善行章二線の上等兵曹が壇上へ、横に将校三十人ぐらいが居並ぶ。「兵隊を指導すべき立場にありながら……」と言うなりバット一つ二つ三つ……敵しいと聞いていたことを見た。

八月十二日、昼食後一時、上海行き、兵舎前に整列。下士官一人兵六人、乗船は「上海丸」（八千トン）。七人は交替で見張り板切れ一つでも届け、二日目初めて大波を見た。八千トンの船も波間に入ると周囲は水、また水。変わって波の上に乗ると一望千里というように遠くが見える。ほとんどの者が船酔いで、食事はいらぬ。私は船酔いせず、見張ることができたことは後の作戦にも役立った。

右に左に見える駆逐艦の護衛を受けて三日目、水の色が変わったところから五時間ほどで港に着いた。そして上海、中国大陸に第一歩を記し、上海海軍特別陸戦隊よりの迎えの車で仮入隊、半日ほどで上陸を後に南京警備隊司令・梅崎宇之介大佐に報告。第三回目の受信の教育を受けることになった。初めは同盟通信の新聞電報を辞書を持って翻訳し、当直下士官に見てもらう。船ではこれが唯一の新聞。次は当直者の傍らで送受信を担当す。しばらく日が経つと、下士官が横で見えて後より細かく補足。一カ月ほどでできるようになったが、もし悪い場合は監査艦所から後日何時何分

どこからどこへどうした、と誤りと指摘が届き、室長から程度により小言なり処罰を受ける。

武村正男氏の終戦前後の手記は、第VII巻に掲載されております。

一人当直ができるようになって、十月が終わろうとしていた。室長・福島政二郎上曹から、蘇州へ行って三カ月ほどで帰ってくる予定と言われ、行くことになった。「気張れ」と言われ、餞別として一円頂いたが、その後、南京警備隊に帰ることはなかった。名前も蘇州砲艇隊から上陸気付の富樫隊に変わった。任務は水路の哨区哨戒で、輸送の安全を護ることで、無錫、鎮江、杭州、平望、嘉興、上海等の蘇州河、黄浦江、澱水湖、時には陸軍の作戦に水路封鎖等の協力をする。

昭和十八年六月、江南造船所に移動することになり、蘇州砲艇隊を陸軍の暁部隊の船舶隊へ渡すまで八人が残務整理となり、八月二十六日江南に帰り、翌日作戦説明を受けた。

〔編注〕